

日 時：2026 年〔令和 8 年〕6 月 26 日

参 加 者：岡村眞由美・岡村繁雄 他 2 名

行 程：レイク・ルイズ シャトルバス乗り場 [シャトルバス] ⇒ レイク・ルイズ駐車場
 → ミラー・レイク → ティーハウス → ビッグ・ビーハイブ → ティーハウス
 → リトル・ビーハイブ → ミラー・レイク → レイク・ルイズ駐車場 [シャトルバス]
 ⇒ モレーン・レイク駐車場 [シャトルバス] ⇒ レイク・ルイズ シャトルバス乗り場

行動時間：7 時間

カナダの山旅の計画を立てるにあたり、秋山裕司、石塚体一 著『カナディアンロッキーのハイキング・ガイド』を参考にして、歩くコースを選定した。

今回の滞在では、以前にも利用したキャンモアの日本人経営の B&B モナークに宿泊することにした。出発前からオーナーの小川さんとメールで連絡を取り合い、現地の登山情報や道路状況、天候などについて詳しい情報を提供していただき、それらを参考にしながら日程を決定した。

出発が近づくにつれて天候を確認し、まずはレイク・アグネス・トレイルを歩くことに決めた。しかし、コロナ禍以降、レイク・ルイズへ入るシャトルバスは事前予約制となっており、予約を確保することも非常に難しくなっていた。

そこで小川さんに協力をお願いしたところ、幸運にもレイク・ルイズへのシャトルバスの予約を確保していただくことができた。また、並行してレイク・オハラへの入山予約もお願いしていたが、こちらは競争率が高く、残念ながら事前予約を取ることはできなかった。

今回のコースは、レイク・ルイズからミラー・レイク、ティーハウスを経てレイク・アグネスへ向かい、さらにビッグ・ビーハイブへ登った後、再びティーハウスまで下山。そこからリトル・ビーハイブを経由してミラー・レイク、レイク・ルイズへ戻る周回コースである。



Google マップより



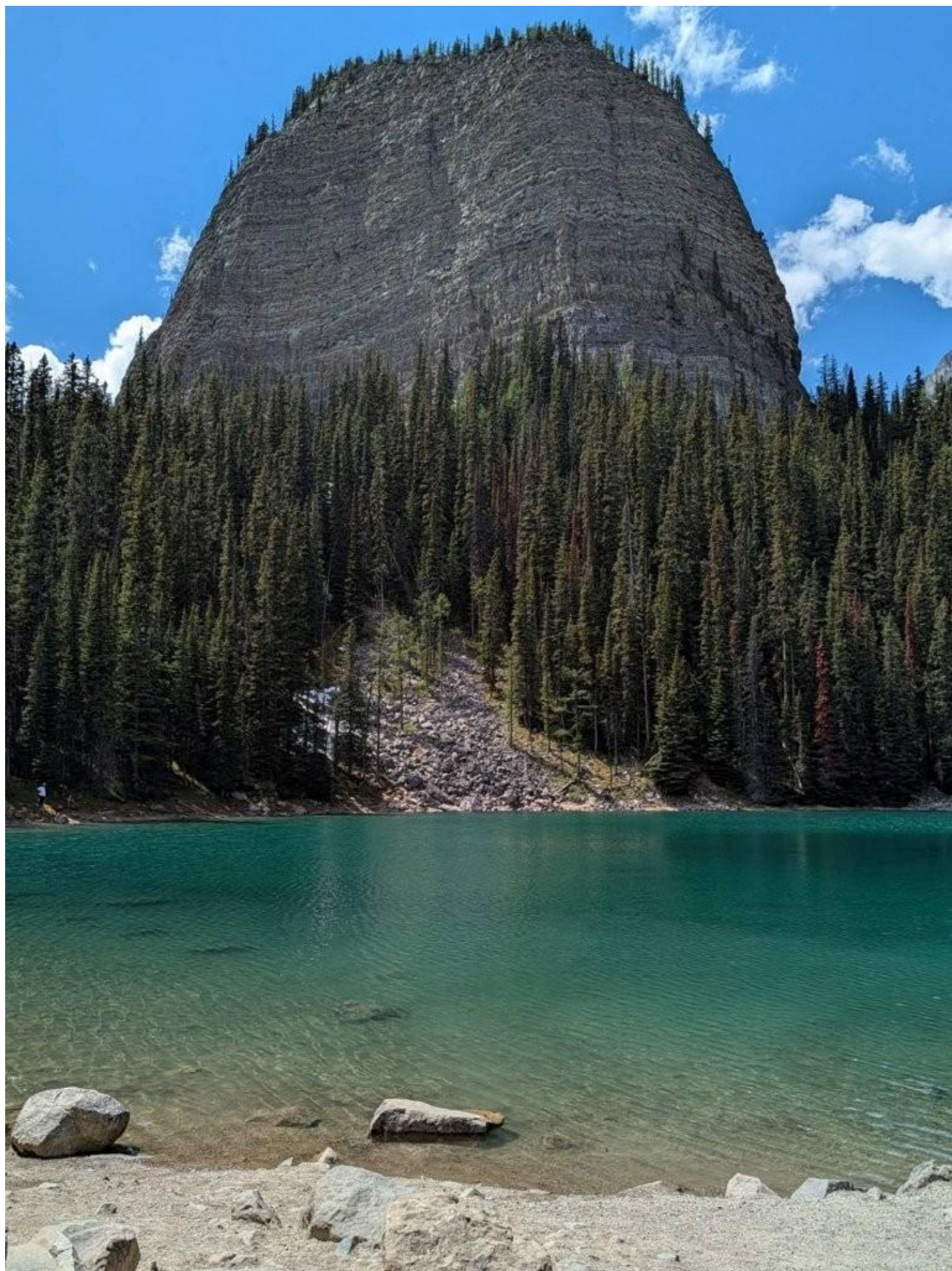
レイク・ルイーズ



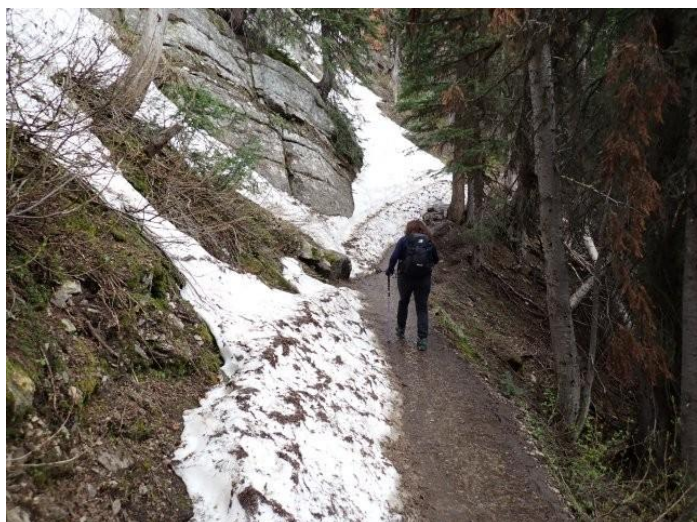
トレイルの入口 木製の階段



緩やかな勾配の登山道



ミラー・レイクより下山時にビッグ・ビーハイブを望む



残雪が見られるようになった



この木の階段を抜けるとティーハウス



ティーハウス



ティーハウス付近では、人なれしたリスが走り回っていた
ゴールデンマントルド・アシリス (Golden-mantled ground squirrel)



ティーハウス付近よりレイク・アグネスを望む



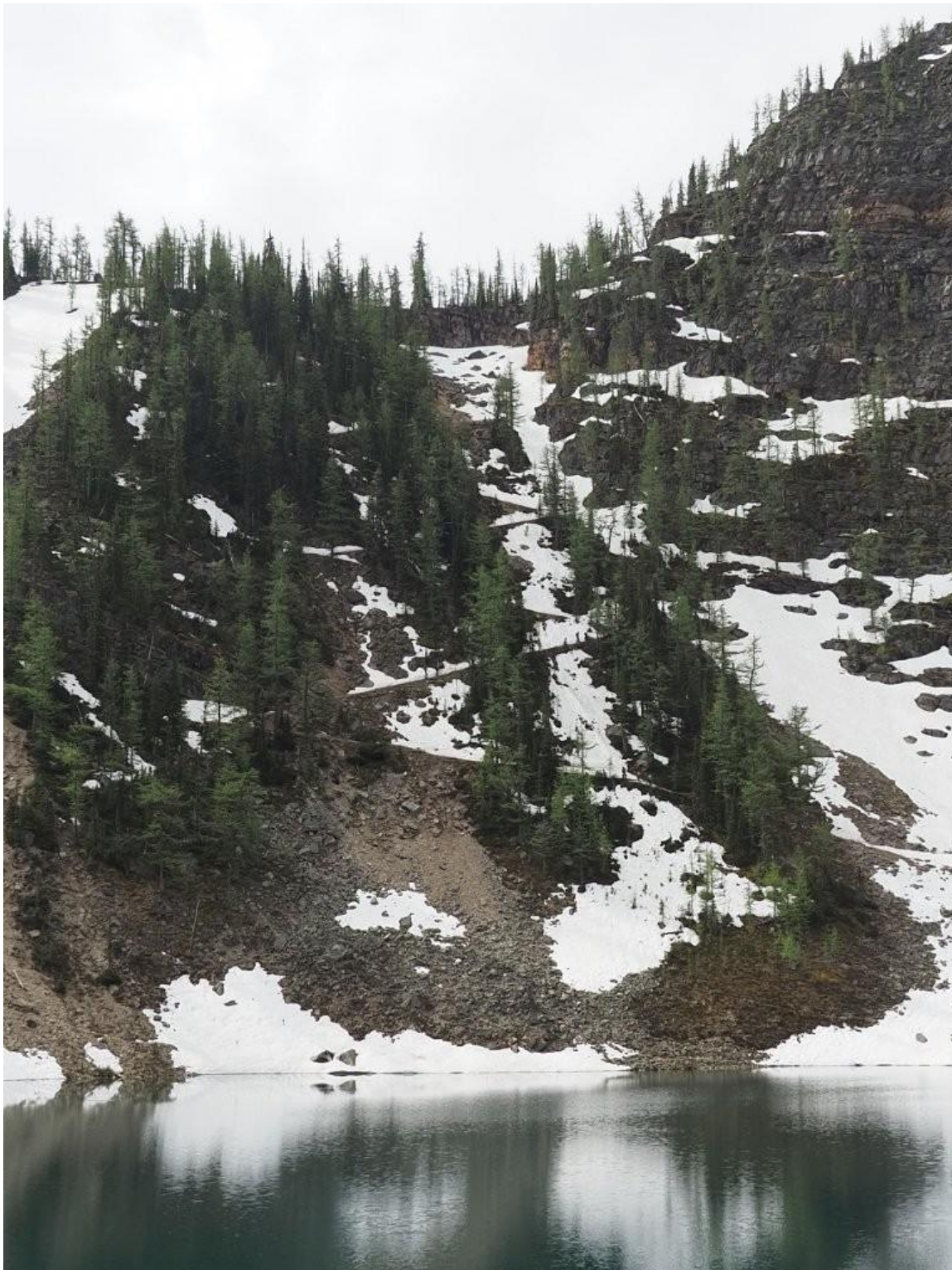
対岸からのレイク・アグネスとティーハウス

ティーハウス周辺では、人に慣れたリスがあちこちを走り回っていた。ゴールデンマントルド・グラウンド・アシリス (Golden-mantled Ground Squirrel) で、近くまで寄ってきても、人をあまり警戒する様子はない。その愛らしい姿に、思わず足を止めてカメラを向けた。

ティーハウスを過ぎると、レイク・アグネスが大きく姿を現し、美しい湖面が目の前に広がった。湖畔の景色を楽しみながら左岸を進み、湖の奥で右岸側へ渡ると、いよいよビッグ・ビーハイブへの登りが始まる。

左岸から対岸を望むと、ビッグ・ビーハイブへ向かう登山道が斜面を上っていくのが見えた。その斜面にはまだ雪渓も残っている。6月下旬とはいえ、標高の高い場所には多くの残雪があり、カナディアンロッキーの山岳地帯ならではの雄大な景観が広がっていた。

ここからは、それまでの緩やかな道とは一変し、急斜面をジグザグに登っていく。高度を上げるにつれて、眼下のレイク・アグネスが次第に小さくなっていく。途中で振り返るたびに、眼下に広がる美しい湖と、それを取り囲む山々の雄大な景色を楽しむことができた。



レイク・アグネス左岸より
ビッグ・ビーハイブへの
ジグザグの登り



レイク・アグネス左岸より対岸(右岸)のピック・ビーハイブへの登山道の雪渓〔望遠〕

登っている途中から天候がやや悪化し、小雨が降り始めた。しかし、しばらくすると天候は次第に回復し、雲の切れ間から青空が広がってきた。



レイク・アグネスよりピック・ビーハイブへの登り



ピック・ビーハイブへのジグザグの登山道の途中からレイク・アグネスを望む



ピック・ビーハイブへのジグザグの登山道の途中からレイク・アグネスの左岸を望む



ビック・ビーハイブの展望所より



末端の展望台に到着



展望台先の岩場より
望む、濃いブルーが
印象的なレイク・ル
ーズ

シャトー・レイク・ルーズ
並びに駐車場を望む〔望遠〕



ジグザグの登りを終え、ビッグ・ビーハイブの展望所に到着した。

展望台からは、眼下に濃いブルーのレイク・ルーズが大きく広がり、その湖畔にはシャトー・レイク・ルーズが見える。さらにその先には広大な駐車場まで望むことができた。

高い場所から見下ろすレイク・ルーズは、湖畔から眺める景色とはまったく異なり、湖の大きさと周囲を取り囲む山々の雄大さが一望できる。今回のハイキングの中でも、特に印象に残る景色であった。

展望台の先の岩場からもレイク・ルーズを望むことができ、濃いブルーの湖面が強く印象に残った。



ビッグ・ビーハイブより下山後、レイク・アグネス西側の谷にて

ビッグ・ビーハイブで十分に景色を楽しんだ後、再びレイク・アグネスまで下山した。

下山してきた頃には、すっかり青空が広がっていた。登るときには小雨が降っていたにもかかわらず、わずかな時間で天候が回復し、山と湖が明るい日差しの中に姿を現した。登りと下りでまったく違った景色を楽しめたのも、この日のハイキングの印象的な出来事であった。

ティーハウスを経由して、今度はリトル・ビーハイブへ向かった。



リトル・ビーハイブへ登る途中
ミラー・レイクとレイク・ルイズ
を望む



リトル・ビーハイブへの登りでは、眼下にミラー・レイク、その奥にレイク・ルイズを望むことができた。ビッグ・ビーハイブとは異なる角度から二つの湖を眺めることができ、ここからの景色も素晴らしかった。

リトル・ビーハイブ山頂付近の展望台は、現在は土台だけが残されていた。しかし、その付近からはビッグ・ビーハイブ全体を見渡すことができ、先ほどまで立っていた展望台もはっきりと確認できた。

自分たちが先ほど歩いていた場所を反対側から眺めることで、ビッグ・ビーハイブの大きさや地形を改めて実感することができた。



リトル・ビーハイブ山頂の
展望台は土台のみ



リトル・ビーハイブ山頂付近よりビック・ビーハイブを望む〔末端の展望台が確認できる〕



目の前でこのポーズをされると シャッターを切ってしまう



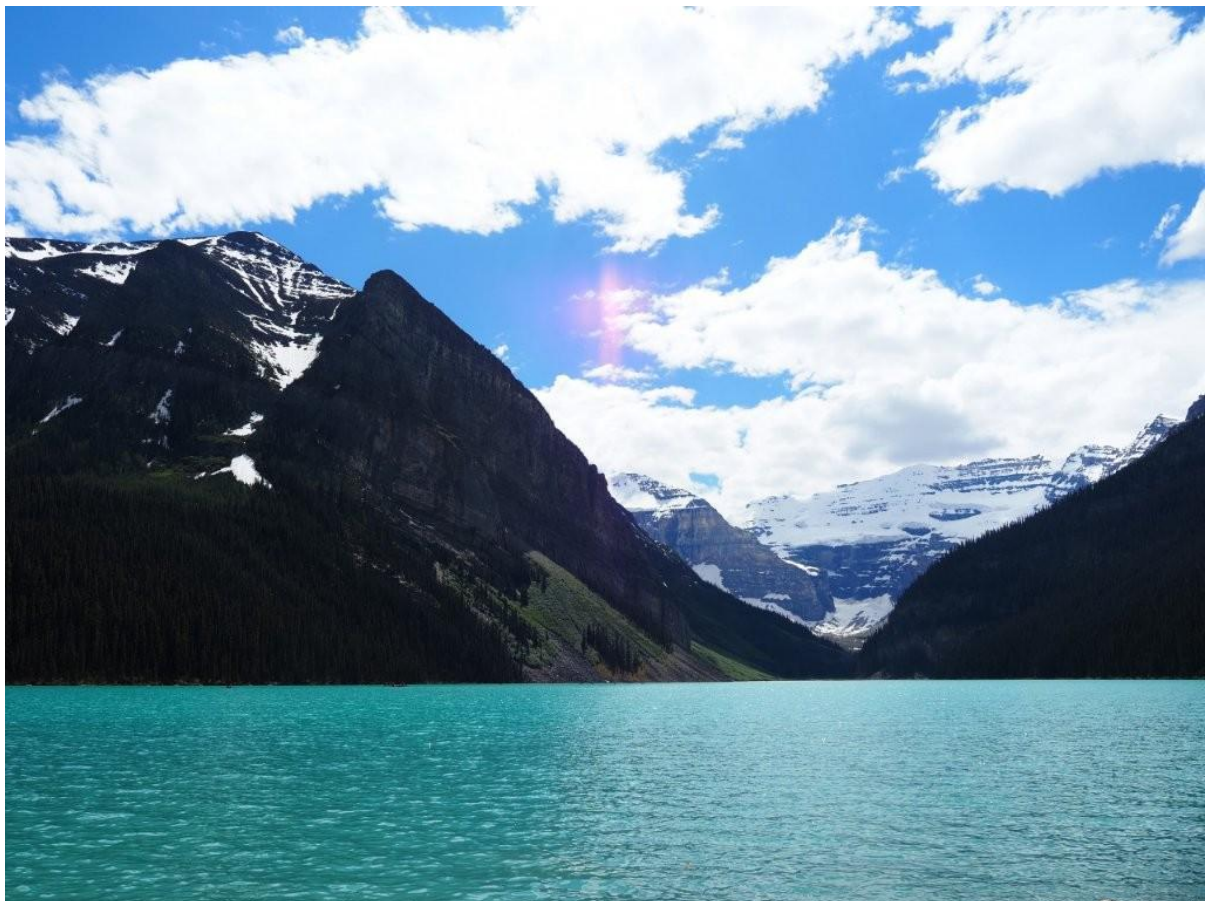
下山途中 馬に乗ったツアーグループと遭遇

下山途中には、10 頭ほどの馬に乗った一団と遭遇した。ガイド付きのツアーと思われるグループで、ゆったりとした足取りで私たちの前を通り過ぎていった。

しばらくすると、その後ろから馬の糞を登山道脇へ片付けながら歩くスタッフの姿も見られた。多くの人が利用するトレイルをきれいに保つため、自然環境や登山道の維持にも配慮している様子うかがえた。

さらに、リトル・ビーハイブとレイク・アグネス・ティーハウスへの分岐を少し下ったところで、一匹のリスに出会った。

カメラを向けてもまったく逃げる様子がなく、むしろ餌をねだるように目の前で愛らしいポーズをとってくれた。目の前でこんなポーズをされると、思わずシャッターを切ってしまう。おかげで、とてもかわいらしい写真を撮ることができ、今回のハイキングの楽しい思い出の一場面となった。



レイク・ルイーズ
〔下山後撮影〕



モレーン・レイク

その後、ミラー・レイクを経由して無事にレイク・ルイズ湖畔へ戻ってきた。

朝とは一変して、湖畔は観光客であふれ返り、大変な賑わいとなっていた。ちょうど停車していたシャトルバスに乗り込み、疲れもあって車内ではうとうとしてしまった。

行きは約 15 分でレイク・ルイズへ到着したが、帰りは 30 分ほど走ったところで下車することになった。しかし、そこで気がつく、そこは出発した駐車場ではなく、思いがけずモレーン・レイクであった。

どうやら乗車したシャトルバスは、レイク・ルイズ駐車場へ戻る便ではなく、モレーン・レイク方面の便だったようである。

せっかくなので、予定外ではあったがモレーン・レイクの湖畔を少し散策し、数枚の写真を撮影した。その後、再びシャトルバスに乗り、レイク・ルイズのシャトルバス乗り場へ戻った。

広大な駐車場は平日にもかかわらず、ほぼ満車状態であった。シャトルバスが予約制となった現在でも、これほど多くの人が訪れていることに驚かされた。

今回のカナダ山旅最初のハイキングは、レイク・ルイズからミラー・レイク、レイク・アグネス、ビッグ・ビーハイブ、リトル・ビーハイブを巡る充実した一日となった。

途中では小雨に見舞われたものの、その後は天候が回復し、青空の下でレイク・アグネスやレイク・ルイズの美しい景色を楽しむことができた。特にビッグ・ビーハイブから見下ろすレイク・ルイズは圧倒的な美しさで、今回のハイキングで最も印象に残る光景となった。

さらに、途中で出会ったリスや馬のツアーグループ、そして予定外に訪れることになったモレーン・レイクなど、思いがけない出来事もあり、変化に富んだ一日であった。

美しい湖と雄大な山々、刻々と変化する天候、そしてカナディアンロッキーならではの自然に触れることができ、今回のカナダ山旅の幕開けにふさわしい、素晴らしいハイキングとなった。

北九州山岳同好会「嵐」

Reported by S.Okamura Photo presented by S.Okamura